

[A年] 待降節第2主日(2020年12月2日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書 59章12～20節

- 12 御前に、わたしたちの背きの罪は重く
わたしたち自身の罪が不利な証言をする。
背きの罪はわたしたちと共にあり
わたしたちは自分の咎を知っている。
- 13 主に對して偽り背き
わたしたちの神から離れ去り
虐げと裏切りを謀り
偽りの言葉を心に抱き、また、つぶやく。
- 14 こうして、正義は退き、恵みの業は遠くに立つ。
まことは広場でよめき
正しいことは通ることもできない。
- 15 まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる。

主は正義の行われていないことを見られた。
それは主の御目に悪と映った。

- 16 主は人ひとりいないのを見
執り成す人がいないのを驚かれた。
主の救いは主の御腕により
主を支えるのは主の恵みの御業。
- 17 主は恵みの御業を鎧としてまとい
救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい
熱情を上着として身を包まれた。
- 18 主は人の業に従って報い
刃向かう者の仇に憤りを表し
敵に報い、島々に報いを返される。
- 19 西では主の御名を畏れ
東では主の栄光を畏れる。
主は激しい流れのように臨み
主の霊がその上を吹く。
- 20 主は贖う者として、シオンに来られる。
ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると
主は言われる。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 16章25～27節

25神は、わたしの福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることができになります。この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画を啓示するものです。26その計画は今や現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に知られるようになりました。27この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

イザヤ書 59章12～20節

- 12 私たちの背きの罪はあなたの前に多く
私たちの罪が不利な証言をする。
私たちの背きの罪は私たちと共にあり
自らの過ちを、私たちは知っている。
- 13 主に背いて欺き
私たちの神に背を向け
虐げと反逆を語り
心に偽りの言葉を抱き、それを口に出す。
- 14 公正は後ろに退けられ、正義は遠くあなたに立つ。
眞実は広場でつまずき
正しいことは入ることができない。
- 15 眞理は失われ、悪から離れた者も略奪される。

主はこれをご覧になり
公正がないことを不快に思われた。

- 16 主は人のいないのを見
執り成す人がいないことに驚かれた。
そこで、主はその腕で自らに勝利をもたらし
その正義でご自身を支えた。
- 17 主は正義を鎧として身に着け
救いの兜を頭にかぶり
報復の衣を身にまとい
妬みの上着で身を包まれた。
- 18 主は仕業に応じて報い
敵対する者には憤りを
敵には報復を
島々にも報復を返される。
- 19 西では主の名を畏れ
東では主の栄光を畏れる。
主は激しい流れのようにやって来る。
主の息吹がそれを押し流す。
- 20 贖い主がシオンに来る。
ヤコブのうちで
背きの罪から立ち帰る者のもとに来る
——主の仰せ。

ローマの信徒への手紙 16章25～27節

25〔神は、私の福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることができになります。この福音は、代々にわたって隠されていた秘儀を啓示するものです。26その秘儀は、すべての異邦人を信仰による従順へと導くようにとの永遠の神の命令に従い、今や預言者たちの書物を通して明らかにされ、知らされています。27この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。〕

新共同訳【福音書日課】

マタイによる福音書13章53～58節

53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」57 このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、58 人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書13章53～58節

53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と力をどこから得たのだろうか。55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアと言い、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちも皆、私たちのところにいるではないか。この人はこれらすべてのことを、一体どこから得たのだろう。」57 こうして、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、58 人々の不信仰のゆえに、そこではあまり奇跡をなさなかった。

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・12月6日「待降節第2主日」の日課主題は「旧約における神の言」。キリスト教会は、早い段階(2世紀ごろ)から「旧約と新約」によって構成される「聖書」全体をもって「神の言葉」として扱ってきた。16世紀宗教改革の時代には何をもって「神の言葉」としての権威を認めうるのかということが問題とされるようになったが、それは別言すれば、「聖書」はいかに解釈するこ

とによって「神の言葉」としての権威を持ちうるのか、という問題であった。ローマ・カトリック教会は、「歴史的教会」の権威を前提に、教会の公式聖書(通例「ウルガタ」と呼ばれるラテン語訳聖書。16世紀に初めて公認された)を「使徒継承」(教会の司祭制度)による伝統・伝承に基づいて解釈する「聖書と聖伝」の立場を取った。ルター派は、「聖書」の範囲・枠組みを厳密に定義することはしないまま、「聖書」自身が「聖書」の解釈を示すという「聖書の内的照明」の立場を取った。カルヴァン派・改革派は、「御言葉により改革される教会」を前提に、「説教される聖書が《神の言葉》になる」という立場を取った。

・元来、主イエスや初代教会の弟子たちの間で「神の言葉」として認識されていた書物は、ユダヤ教正典である「ヘブライ語聖書」またはそのギリシア語版「七十人訳聖書」、すなわちキリスト教会が「旧約聖書」と呼ぶ文書であった。ただし、初代教会が誕生した1世紀中葉当時、ユダヤ教内で聖書正典はいまだ最終確定しておらず、「律法と預言者」の正典的権威に対して、「諸書」の権威は相対的に低かった。これらが同等の正典的権威を認められるようになるのは、紀元70年にユダヤ戦争の結果としてエルサレム神殿が破壊され、各地に点在する「会堂(シナゴグ)」共同体を指導してきた「ラビ」たちの権威が増してからである。この「ラビ」を中心として以後発展した「ラビ的ユダヤ教」は、「ファリサイ派」の伝統の中から生まれたと考えられ、初期キリスト教会の制度形成にも多大な影響を与えたと考えられる。この「ラビ的ユダヤ教」では、「律法と預言者と諸書」として確立された聖書正典が「成文律法」として最大限重視すると同時に、「口伝律法」の存在も重視され、2世紀末までに口伝律法集としての「ミシュナー」が、6世紀までには口伝律法解釈集として「タルムード」が編纂され、これらが正典「律法・預言者・諸書」と共にユダヤ教の聖典(聖書)とみなされている。このようなユダヤ教における動きに並行するようにして進んだのが、キリスト教会における「新約」の編纂と正典としての権威化である。「ミシュナー」や「タルムード」は、口伝律法の実質的な担い手であったラビたちによってなされた、成文律法である正典「律法・預言者・諸書」の解釈集として位置づけられるのに対して、「新約」は、主イエスや使徒たちによってなされた正典「律法・預言者・諸書」の解釈集として位置づけられる。

・「律法・預言者・諸書」に準ずる正典として「新約」を編纂した古代教会は、「律法」の正しい解釈者として「預言者」を位置づけた上で、主イエスを「預言者」のさらに上位に位置づける形で「律法授与者」と等しい方と理解した。「律法」の真の解釈者は「律法授与者」を置いて他にはいない、ということである。このことを意味する神学として「神の子」や「神の言葉の受肉」ということが論じられるのである。

旧約日課(イザヤ 59 章より)

・「イザヤ書」は、旧約正典中「預言者」を代表する文書で、紀元前 8 世紀から同 6 世紀にかけて南王国で継承された祭司・預言者集団の伝統の主流に位置するものと考えられる。本書は、39 章までが前 8 世紀の預言者イザヤの時代を背景にする一方、40 章以下は前 6 世紀のバビロン捕囚と解放・帰還の時代を背景にしており、前者を「第一イザヤ」、後者を「第二イザヤ」と呼ぶことがある。初代教会において、本書は主イエスの生涯(降誕から十字架死まで)を理解する上で最重要の正典文書の一つとして扱われたことが推察される。

・日課箇所は、「第二イザヤ」(40 章以下)の中でも後半(56 章以下)に位置し、バビロンからの帰還が進められている時代を背景にしていると学者らは考えるが、むしろ、終末的な視点での裁きと救済についての計画を提示しているものとして解釈することができる。「第一イザヤ」の預言者イザヤが告げる預言の射程は比較的短く、1~2 世代内に実際に起こってくる事柄を見通すものとして告げられている。それに対して「第二イザヤ」の預言の射程は相対的に長く、2~3 世代以上を経て明らかになるような事柄に目を向ける傾向が強くなる。ことに「第二イザヤ」の後半部(56 章以下)では、人の歴史的営みの中では射程を捉えきれないような「神の時間」という射程が、「終末」的表現によって示される。それは、すなわち、神の究極的な救済計画の目標を見定めようとするものであり、「イスラエルの再結集=大イスラエルの再建」ということを超えて、「異邦人も包含した新しいイスラエルの建設」という預言を展開している。

・本書において、神の救済計画は、人々の背信・離反の問題が徹底的に問われる(裁かれる)ことを前提に進められる。ただし、裁きは必ずしもただちに罰として現れてくるものではないことを、特に「第二イザヤ」は示している。「第二イザヤ」前半部に特異的に取り上げられる「主の僕」は「苦難の僕」として描かれ、人々の背信・離反を背負わされ、裁きを一手に引き受けさせられる存在として位置づけられるが、そのことに人々が気づき、神の恵みによる救済を不可欠なものとして受け入れていくようになるまでの過程も、容易なものとしては考えられていない。結局、「苦難の僕」を遣わし用いられるという神ご自身の、人の行為に一切期待せず最終的な救済計画を進めて行かれるという「終末的使信」そのものの中にすべての者が目を開かされていくところに、救済の実現を見いだそうとしているのである。

・日課箇所は、そのような視点から、神の御業が推し進められている過程を見る者がなく、それによって人々を執り成し、悔い改めに導こうとする者もない、ということ告げることによって、逆説的に「神の言葉」としての「預言」の真実性を示すものとなっている。

使徒書日課(ローマ 16 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、前週「待降節第 1 主日」に続いて使徒書日課に選ばれている。日課箇所は、本書簡の末尾に置かれた「讚美頌栄」であるが、古い時代の写本では欠けている場合がある部分で、後代の加筆とも考えられている。同様の讚美頌栄の句は本書簡で 11:33~36 にも置かれている。

・日課箇所は、原文では全体で一文の讚美頌栄となっている。すなわち、冒頭の「神は」と訳されている語は、27 節「神に」と同格の「彼に」であり、27 節の讚美頌栄で対象とする「神」について 25~26 節の長い文節によって倒置修飾している。さらに、25~26 節の中にも修飾句が組み込まれる複雑な構文になっており、一種の典礼的な厳かさを表す修辭法が取られている。日本語訳が四文に分けられているのは、この修飾関係を踏まえて順に訳し下していくためのものである。

・ここで「神に」の修飾句の内容として示されていることは、本書簡冒頭挨拶中の挿入修飾句 1:2~6「この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は…神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。わたしたちはこの方により、その皆を広めてすべての異邦人を信仰の従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです」に対応している。日課箇所は、書簡冒頭で示した主題内容を述べ終えたことを踏まえて、その主題内容を最後に再提示しているのである。ここに現れるように、本書簡の目的は、もっぱら「異邦人の救い(異邦人伝道)」の聖書の根拠を示すことにあり、その聖書の根拠の示され方をパウロは「預言者によって」という表現で示すのである。これと同じ趣旨で讚美祝福の句として記されているのが 15:8~13 であるが、「詩編」や「申命記」を引用するのに続いて「イザヤはこう言っています」と、「預言者」である「イザヤ書」を明示的に引用している。同じような引用の仕方は、10:18~21 にも見られ、「律法(五書)」の引用を強化するような仕方でも「預言者」の書を引用している。ここには、パウロが「律法」の用語を二重の意味で使用する用法(広義の「神の教え」としての「律法」と、五書の内容である戒めや掟としての狭義の「律法」)の中で、狭義の「律法」を否定的に扱わざるを得なくなっているのに対して、広義の「神の教え」としての「律法」を指し示すものとして「預言者」を位置づけていることが推認される。

・25 節「わたしの福音」と「イエス・キリストについての宣教」は、同格的に訳され、後者が前者の内容との解釈で訳されているが、原文では、「わたしの福音」と「イエス・キリストの宣教」が並列されており、パウロは、「主イエスが宣教された事柄」を告げることをもって自らの「福音」告知と理解していたと解釈される。

福音書日課(マタイ 13 章より)

・日課箇所は、主イエスがご自分の出身地であるナザレに帰省されて会堂礼拝に出席されたときの出来事として、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で共通に伝えられている逸話である。いずれの福音書も、主イエスが教えられたことを故郷の人びとに受け入れてもらえなかったと伝え、共通して「預言者は、自分の故郷では歓迎されない」という格言を語られた逸話としている。この格言は、旧約に典拠がないが、旧約正典における預言者らの受けた迫害を主イエスの受けられた迫害と同一線上に結び付けた理解が初代教会で共有されていたことは確かであるから(21:33 以下「ぶどう園と農夫のたとえ」などを参照)、広く知られた一般的な格言ではないのかもしれない。

・共観福音書は、この逸話を共通に伝えているが、その位置づけは異なる。マルコ福音書(6:1~6)は、主イエスが当初、身内家族にも理解されなかったことを強調する延長線上で、この逸話を伝えている。ルカ福音書は、宣教の初めの出来事としてこの逸話を位置づけ、ルカ・使徒言行録を通して「迫害が宣教地を拡大していく」という神の計画を示す出来事の一つとしている。それに対してマタイ福音書は、御言葉の宣教において実を結ぶことのない「毒麦」があるというたとえ(13:24 以下)を独自の伝承として示し「天の国」の二重性(福音が告げられたところにおいて、事実天の国に生きている者と、天の国に生きていない者が同時に共存する状態が終末まで続いている)を告げたこと文脈の中にこの逸話を置いている。

・この逸話では、主イエスも「預言者」の一人として位置づけられているが、マタイ福音書では主イエスを「律法と預言者の完成者」(5:17)として明確に位置付けており、「預言者」以上の者とみなしている。

来週の誕生日 (12月6日~12日)

。

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-231 番「久しく待ちにし」(= I 94)は、9世紀のアンティフォン(交唱聖歌)に基づいて13世紀ごろに再構成、18世紀に現在の形になった。原曲は15世紀フランスの女子修道院の歌集に見られる。
- ・21-194 番「神さまはそのひとり子を」は、1966年版『こどもさんびか』編纂に際して、編纂委員の一人で日本を代表する讃美歌学者の由木康がヨハネ 3:16の聖句に基づき作詞し、阿佐ヶ谷教会員で作曲家の小山彰三に作曲を委嘱して作られた。
- ・21-79 番「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美讃美で、19世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。
- ・21-229 番「いま来たりませ」(= II 96)は、前週資料 201125 を参照。

21-231「久しく待ちにし」**Veni, Veni, Emmanuel**

1. Veni veni, Emmanuel / captivum solve Israel, / qui gemit in exsilio, / privatus Dei Filio. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
2. Veni, O Sapientia, / quae hic disponis omnia, / veni, viam prudentiae / ut doceas et gloriae. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
3. Veni, veni, Adonai, / qui populo in Sinai / legem dedisti vertice / in maiestate gloriae. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
4. Veni, O lesse virgula, / ex hostis tuos ungula, / de spectu tuos tartari / educ et antro barathri. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
5. Veni, Clavis Davidica, / regna reclude caelica, / fac iter tutum superum, / et claude vias inferum. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
6. Veni, veni O Oriens, / solare nos adveniens, / noctis depelle nebulas, / dirasque mortis tenebras. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
7. Veni, veni, Rex Gentium, / veni, Redemptor omnium, / ut salvas tuos famulos / peccati sibi conscios. / Gaudet! Gaudet! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!

21-79「みまえにわれらつどい」**Let us break bread together**

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.

Refrain:

- When I fall on my knees, / With my face to the rising sun,
/ O Lord, have mercy on me.
2. Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
 3. Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]

21-229「いま来たりませ」**Nun komm, der Heiden Heiland**

1. Nun komm, der Heiden Heiland, / Der Jungfrauen Kind erkannt! / Dass sich wundre alle Welt, / Gott solch' Geburt ihm bestellt.
2. Nicht von Mann's Blut noch von Fleisch, / Allein von dem Heil'gen Geist / Ist Gott's Wort worden ein Mensch / Und blüht ein' Frucht Weibesfleisch.
3. Der Jungfrau Leib schwanger ward, / Doch blieb Keuschheit rein bewahrt, / Leucht't hervor manch' Tugend schön, / Gott da war in seinem Thron.
4. Er ging aus der Kammer sein, / Dem königlichen Saal so rein, / Gott von Art und Mensch ein Held, / Sein'n Weg er zu laufen eilt.
5. Sein Lauf kam vom Vater her / Und kehrt' wieder zum Vater, / Fuhr hinunter zu der Hoell' / Und wieder zu Gottes Stuhl.
6. Der du bist dem Vater gleich, / Führ' hinaus den Sieg im Fleisch, / Dass dein' ew'ge Gott'gewart / In uns das krank' Fleisch erhalt'.
7. Dein' Krippe glänzt hell und klar, / Die Nacht gibt ein neu Licht dar, / Dunkel mus nicht kommen drein, / Der Glaub' bleibt immer im Schein.
8. Lob sei Gott dem Vater g'tan, / Lob sei Gott sein'm ein'gen Sohn, / Lob sei Gott dem Heil'gen Geist / Immer und in Ewigkeit!